

## 人工呼吸器と共に普通学級への思い

表題は「名古屋市 一年一組 京ちゃんの進む道」の副題がついた『福祉労働』138号、2013年春に掲載されたレポート。筆者は林京香さん、京ちゃんのお母さん、林有香さん。

「気管切開から在宅生活へ」「在宅生活の苦難と療育センターでの生活」「普通保育園へ」「地域の人々と過ごしたい!」「楽しい学校生活と壁」で構成された、京ちゃんの誕生から小学校1年までの感動の記録だ。「インクルーシブ教育」にかかわる貴重な言葉を抜き出しておきたい。

「成長」とは、健常児と同じ能力に追いつくことや障がいを克服することではなく、共に生きることでありのままの自分をお互いが認め合い、助け合うことが子どもの成長につながるのだと思います。

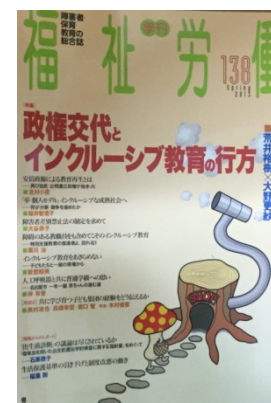
現在の学校生活の問題は、支援学級籍であれば配慮できるが、普通学級籍では配慮できないといった場面があることです。そのような分けた上での支援体制を廃止し、子どもの幸せと成長を本気で大人が考えていくことが文科省の取り組むべき姿勢ではないでしょうか。

学校のバリアフリー化は地域の人すべてにとっての安心を考えた整備です。学習だけが学校生活で学ぶことではありません。一緒に過ごす日々のなかで、お互いの価値観や個性を認め合い、相手の立場にもなれることが大切です。障がいのある子どもとそうでない子どもの両者が、生きることの素晴らしさ、命の尊さを肌で実感することも、素敵な成長だと思います。

一緒にいて当たり前な存在。病気のことは詳しく分からなくても、京香の特性は充分感じ取っている仲間たち。バリアフリー化がすべて良いわけではなく、不便だからこそそこに人との関わりが生まれます。

インクルーシブ教育の根本となる「共に学び合える」「6歳の春を入口で分けない」「どんなに重い障がいをもっていても輝いて生きる」ということを声に出し、これからも地域から発信していきたいと思います。

さいごの著者紹介のところに、講演担当・父(智弘)、執筆担当・母(有香)と書かれている。京ちゃんのご両親は二人三脚で、講演と執筆により、地域からどんどん発信している。それに応えて、京ちゃん、妹ちーちゃんも元気に育っている。頼もしいかぎりだ。



(2016年10月10日)